

みんなのヒロカ話

VOL.2



広報ヒロカワの中の人  
園川泰草さん（下段・中央）

広川町で活躍する人をリレー形式で紹介するコーナー。第2回は、広報紙担当の一人であり、現在はお茶農家としても働く園川さんです。

人生のコンセプトは「挑戦と経験」

コロナ禍に新天地を求めて福岡へ  
現在、「広川町の広報紙制作」と「お茶農家」という、異色の二足のわらじを履く園川さんは、5年前に広川町に移住しました。それまでは、出身地の東京で、出版社や時計店、Web制作など、異なる畑でさまざまな経験を積んできたそうです。コロナ禍を期に、どこにいても仕事ができる環境が整備されたため、地方への移住を決めました。

移住当初、Web制作を仕事としていた園川さんの日々のコミュニケーションといえば、家族や地元の人たちと連絡をとるか、オンライン会議で東京のお客さんと打ち合わせをするかでした。そのような生活を続ける中で「自分は何のために移住したのだろうか?」と疑問を抱くようになり、「せっかくなので来たこの町で、地元の人たちとコミュニケーションをとり、地域の役に立ちたい!」と思い、商工会に相談に行き、広川町の人たちとつながりももらったそうです。

好奇心が原動力

「東京で生まれ育ったため、ほかの地域のこととは分かりません。だから知りたかった。まだ自分が経験していないことや知らない世界を見たい。その好奇心が私の原動力です」と、ワクワクした表情で語ってくれました。

次回はどんな人にバトンが渡るのでしょうか。お楽しみに!

広川文芸

ひろかわ俳句会



枇杷の実に我が物顔の野鳥たち  
乱れなき大和ごころよ花菖蒲  
どくだみを干す軒下の竹の竿  
水含みキラリと梅の反射かな  
麦の秋ふるさとの風胸に満つ  
ほそみちのででむしひとつとおせんぼ  
すいかずら居場所告ぐごと香を放つ  
行き合ひや異国語ばかり阿蘇登山  
若草の単衣に変へて茶席行く  
喜雨きたる畑の散水足あらう  
根ザレ後の心地よきかな生ビール

- 原口 正信
- 青木佳代子
- 結束 節子
- 溝田 幸
- 西村智佳子
- 坂田 康治
- 渡辺 弘子
- 原口あつ美
- 一瀬砂智子
- 水本 艶子
- 酒井 司

櫻の会

若沖のにわとりの絵に引きこまれ近づきすぎて額を打ちぬ  
車までのわづかばかりを雨に濡れくさめのふたつ不甲斐なきかな  
新緑のトンネルを抜け深呼吸阿蘇のパノラマ白いパラソル  
果てしなく寄せる潮風身にまとう十年ぶりの夫との帰省  
野も山も緑ひと色深呼吸ペースメーカー入れし胸にも  
父の日に父を持たぬと改めてしのぶ朝なり 花菖蒲活く

- 一瀬砂智子
- 中倉 明美
- 濱武美智子
- 山崎美代子
- 小西 俊郁
- 青木佳代子

# ふるさと 再発見

広川町郷土史研究会

## 広川町にある巨樹・珍樹 その23

### ～町内でナンジャモンジャの自生を発見～

「ナンジャモンジャ」と呼ばれる木を知っていますか。

一般的にはヒトツバタゴという樹木で、木曽川流域や対馬に自生していることで知られています。4月中旬ごろには、花びらが深く裂けた純白の小花を、枝先にびっしりと咲かせます。対馬では、満開時にその花が海に映えることで有名です。

『牧野日本植物圖鑑』では、「白色ニシテ多数枝上ニ開ク時ハ、遠望宛モ雲ノ如シ」と表現されています。花が奇麗なことから人気があり、庭園樹だけでなく街路樹としても植栽されるようになりました。

ところが、「ナンジャモンジャ」という呼び名はヒトツバタゴだけを指すものではありません。朝倉郡朝倉町の古塔塚にあるナンジャモンジャは、福岡県指定の天然記念物ですが、実はタブノキです。千葉県神崎町の神崎神社にあるナンジャ

モンジャは、国指定の天然記念物ですが、クス(樟)です。その名は、水戸光圀公が参詣の際に「この木は何というもんじゃるか」と自問自答したことによるといいます。

このように「何という名の木だろう」と尋ねたり疑問を持つたりといったことが、いつしか地元では「ナンジャモンジャ」と呼称するようになったといわれています。

町内にも植栽されたナンジャモンジャ(ヒトツバタゴ)は複数か所で見かけるようになりましたが、約25年前、

町内のどこかに自生する木がないかと、ずいぶんと探したことがあります。その時に当条区の地内でかろうじて1本、自生木を発見することができました。

雑木林の中に人知れず、ぼつんと1本、枝先に純白の花をびっしりつけている「ヒトツバタゴ」に出合った時は、広川町にも自生木があったのかと、感動しました。

ヒトツバタゴは一ツ葉タブノキで、タブノキ(トネリコ)が複葉なのに対して、単葉であることにちなみます。



▲ヒトツバタゴ (当条区)

### 広川町古墳資料館だより

七夕の季節になりました。日本には、短冊に願いごとを書いて笹につるす風習があります。中国の織姫と彦星の伝説に、棚機という織物が上手な乙女が織った布をご先祖さまに捧げる日本古来の行事

が融合して、現在の七夕行事になったといわれています。広川町古墳公園資料館では、竹の笹と短冊を準備しています(8月初旬まで)。今年1年の願い事や目標を書いてつるしてみませんか。

